新任教員として学んだこと

赤　尾　美　咲

１．はじめに

私は教員生活をスタートすると同時に、初めて静岡県民になりました。教員生活を始める前まで静岡県に足を踏み入れたこともない私ですが、現在は磐田市の市費負担教諭、通称「ふるさと先生」として働いています。私にとって磐田市は言葉通りの「ふるさと」ではありません。しかし、磐田市で教員として生活を送る中で、人々のやさしさに触れ、この地の恵みを感じ、日に日にこの地への愛着が増しています。現在は、外から来たものである私だからこそ気付くことのできる地域の豊かさを教員として、地域の一員として、伝えていきたいと考えています。

私が磐田市を教員生活のスタートに選んだのには、いくつか理由があります。１つは関西学院大学の教職センターにて、「ふるさと先生」の募集ポスターを見かけた時、なぜだか強く惹かれるものを感じたからです。「ふるさと先生」の試験は12月にあったため、最後の採用試験のチャンスだと思い受験することを決めました。当時は見ず知らずの地でしたが、教育情報を集めていくうちに、磐田市は私にとって、英語教育やICTに力を入れている点、講師１年目としての研修が充実している点などから、自分がこれまでに培ってきた力を十分に発揮することができる場であり、新しい学びの場にふさわしい場であると考えました。この地を選んだことに後悔は全くありません。むしろ、毎日を生き生きと過ごすことができており本当に感謝しています。

私の教員生活はまだまだ始まったばかりですが、多感な教員１年目の生活をふりかえり、経験したこと、感じたことを次章から述べていきたいと思います。

２．学校生活について

⑴　学校について

私は縁あって４月より静岡県にある磐田市立磐田第一中学校で勤務しています。勤務校は磐田市の中心地、華のある地区に立地しています。磐田市はヤマハ発動機やジュビロ磐田、東京五輪卓球金メダリストの水谷隼選手や伊藤美誠選手など、多彩な芸やスポーツで盛り上がる、世界各国から人が集まるインターナショナルな地域です。このような地域の中で、１年生６クラス、２年生６クラス、３年生５クラスの計543名の生徒が日々学びを深めています。校訓「平和を誇れ　真理を啓け　文化を創れ」を掲げ、誰もが安心できる、真実や生き方を知ることが出来る、自ら文化を築くことができるよう学校生活を送っています。

⑵　生徒について

本校は、人懐っこく、のびのびと自由な生徒が多くみられます。また海外にルーツを持つ生徒も多く、多国籍で、母国語も様々です。教師と生徒との関係づくりは比較的やりやすいものの、生徒同士は言葉の壁が高く、国籍を超えて交流することが容易ではないという課題があります。また、生徒一人ひとりに目を向けてみると、様々な特性を持っているがゆえに、周りと馴染むのに苦労する生徒も見られます。静岡県では35人学級制度を導入し、よりよい教育活動、人間関係づくりを目指していますが、それでも限られた時間の中で生徒同士の関係や生徒と教師の関係を築きあげていくのは一苦労です。日頃から生徒とコミュニケーションをとることや教師間での情報交換はとても重要であると感じます。

３．個人の役割について

⑴　級外としての半年

私は４月に新入生と共に迎えられ、１年生の学年付きとなりました。１年生３クラスの副担任となり、何をすれば良いのかも分からないままに、時の流れに身を任せ、新学期を始めました。担任の先生がどのように１日を送っているのか、朝の会や帰りの会、学級活動を覗くことから始めました。担任の先生方の業務が少しでも軽減するように自分が出来ることを探すように心がけました。しかし、学級がどのように成り立っていくのか、１年がどのように進んでいくのか分からず、副担任として何を求められているのか、なかなか分かりませんでした。最初は副担任としての仕事の大半が、学年主任から頼まれた事務作業でした。例えば、指導要録に印を押したり、配布物の印刷をしたりしました。とは言え、指導要録がどういう役割を果たすものなのか、印刷機はどうやって操作するのか、など全てが知らないことばかりで

劣等感に苛まれる毎日でした。しかし、それでも担任の先生方からは、「助かる」と感謝される日々でした。ちょっとした作業で感謝されることに不思議さを感じていましたが、後に担任の先生の「助かる」の言葉の重みを感じることになりました。

一方で、副担任をしていると、どうしても学年の生徒との関係が希薄になってしまいがちだと感じていました。副担任として３クラスの生徒に付いていますが、授業以外での関わりはほとんどなく、あるクラスに関しては授業さえも行っていなかったため、信頼関係づくりに苦労しました。名前や顔を覚えることは当たり前で、そこからどのようにその生徒のことを知っていけば良いのか考えました。そのような時に学年主任から「給食中の会話は、その生徒の本当の姿が分かる。」と御指導いただきました。とは言え、今現在、新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため、生徒は黙食をしています。せっかくのチャンスを活かせないのはとても残念でした。しかし、給食を生徒と共に教室で食べるだけでも、「同じ釜の飯を食う」という言葉があるように、生徒たちにとって、私が近しい存在になったようで、教室に来ることを楽しみにしてくれていました。生徒とできるだけ時間を共有する努力は、生徒にも伝わるものだと感じた成功体験となりました。

副担任としての仕事は、はっきり定まったものがありませんでした。だからこそ、自分がどう行動を起こすか次第だと感じていました。楽をしようと思えば、担任の先生方に比べていくらでも楽ができます。しかし、副担任が出来ることを見つけ動くことで、生徒との距離は近くなり、学年の先生方は本当にわずかながらも負担が軽減されます。今この時の事を思うと、教員１年目で何にも染まっていない状態だからこそ、自分がどういう教員になりたいのかを考えながら行動できる貴重な時間だったと感じています。

⑵　担任としての半年

異例の出来事ですが、私は９月末から１年生のあるクラスの担任となりました。特別休暇によりお休みされる先生の代理として突然担任として学級に入ることとなりました。子どもたちは、前任の担任とは突然の別れとなり、寂しい思いをしました。長期的な休養に入ると説明を受けた生徒の中には、泣き出してしまう生徒もいました。突然の事に、生徒も、そして、私自身も動揺しました。もともと副担任として、教科担任としてクラスには入っていたため、生徒とは顔なじみもあり、そこそこに生徒理解があるつもりでいました。しかし、担任になると、それらの生徒の見方が今までとは、がらっと変わりました。そして、副担任の頃と比べ物にならないほど、教員生活がハードになり、新たな教員生活が始まりました。

まず一番に、担任業務が激務であるということを痛感しました。圧倒的に時間が足りません。担任を持つと、道徳科、学活、総合的な学習の時間、これらの授業合わせて４コマ増えました。そして、学級生徒の毎日の日記の点検時間を確保しなければなりません。以前は教材研究に充てていた空き時間を全て学級運営の為に捧げるようになりました。いかに効率良く、一つ一つの作業を進められるかが鍵となりました。副担任の頃、単純な事務作業をして感謝されていた理由がよく分かりました。少しの時間も惜しい程に時間に飢えていることを身に染みて経験しました。

そして、学級の生徒に対する愛に溺れかけました。担任が変わり、悲しい思いをしている学級の生徒たちに少しでも教育的愛情を与えたい、生徒の事を理解したいと必死になりました。生徒は、担任が嫌でも学級から逃げることはできません。だからこそ、たくさん愛してあげたい、育ててあげたいと思うようになりました。このような思いから、生徒の見方が変わりました。どこが出来ていて、何が足りないのか、どうしたら安心して過ごせるのか、一人ひとりをより丁寧に見るようになりました。

そして、出来るようになったこと、成長している点に気が付くようになりました。生徒は、学級通信を渡したり、ちょっとした掲示を飾ったりするだけで、嬉しそうな顔をします。学級の生徒を見ていると、本当にかわいらしく、愛おしいと感じます。真正面に向き合おうとしてくれます。やってあげたい事、親身になってあげたいことはたくさんありますが、限界があるのも事実です。愛せば愛すほど、時間が足りません。してあげられないことに悔しいと思うこともありますが、時間には勝てません。

そして、担任として責任の重さを感じるようになりました。学級の生徒は日々たくさん悩みを抱えていることを知りました。一見楽しそうに見えても、心がモヤモヤしているときもあるようです。そのような様子を見ていると安心して学校生活を送ってほしいと生徒を守る責任を感じます。学習面で悩む子もいれば、人間関係で悩む子もいます。生徒から相談を受ける時には、いつも緊張します。経験の浅い私はどんな声掛けをしてやればいいのか、慎重になります。常にどっしり構えていたいと思いながらも自分の未熟さに不安定さを覚えます。副担任の時には経験しなかったプレッシャーがあり、心が強くなければならないと感じました。

担任はやらなければならない業務が分かりやすく、その業務から逃げることはできません。誰も変わってくれる人がいません。だからこそ、そこにやりがいがあり、学級を育てるという魅力があります。今、担任を経験し

自分の色を出しながら、生徒と共に成長することが出来ていると感じています。

4．教科指導について

⑴　授業について

私は小学生の頃、英語が本当に嫌いでした。英語が嫌いで学校をさぼることまで考えていました。しかし、中学校入学を控えたある日、中学校では英語が毎日のようにあると知りました。絶望を感じた私は、腹を括って英会話教室に通わせてもらえるよう両親に願い出ました。幸運にも英会話教室は楽しく、中学校の英語の先生にも恵まれ、英語嫌いを払拭することが出来ました。この成功体験から英語に対し自信が付き、ここから英語の世界にどっぷり浸かることになりました。中学生に英語を教えたいという思いは自分自身のこれまでの経験からきているのだと思います。

さて、私は１年生２クラス、２年生３クラスの英語を受け持っています。英語は週に４時間あるため、良くも悪くも英語だけで週20コマ授業があります。担任をしていると、学級の授業があるので１週間29コマあるうち、週24コマが授業だけで埋まります。毎日が体力勝負です。余裕のなかった１学期は毎日が自転車操業でした。４月の入学式、始業式を終えるとすぐに通常通り授業が始まりました。授業の準備を事前にしておきたいと考えていましたが、ちょうど教科書が改訂される年だったため、手元に教科書が届いたのは授業が始まる１週間程前だったと思います。教科書の改訂に本当に苦しみました。１年生は新しい教科書１冊に目を通せば良いものの、２年生は改訂前後の教科書を見比べ、未習事項・既習事項を事前に把握しておく必要がありました。教科書の内容自体は私にとって、とても簡単なことなのに、教えるとなると、どのように伝えるべきなのか、どうすれば伝わるのか、非常に悩みました。授業をする前、準備段階であるのに、初めて教えることの難しさに直面しました。

また、１年生も２年生も、１学年を２人で割り振って受け持っています。ベテランの先生とタッグを組むことは大変勉強になっています。授業の進度は、話し合いながら合わせていきますが、授業の細かな計画や内容に関しては全て一人で考えています。４月に先輩から参考としてこれまでの授業のプリントを頂きました。しかし、自分の雰囲気に合っていない物は、たとえ質の高いプリントであっても使いこなせないと感じました。２学年分のプリントを自作するのはかなり時間がかかります。単元のアイデアを出し、授業のイメージをし、少しずつ教科書を深読みして、プリントを仕上げていくため、とても大変です。教員１年目の私には、ストックがないため、常に時間と迫りくる次の授業に追われていました。また、授業の準備も進行も教師が一方的に話せば簡単に済みますが、今の教育が求めている「対話型」の学びにはなりません。そして、特に英語は使うことで理解し、習得するものであるため、生徒の活動が非常に大切です。同じ授業をしても手ごたえのあるクラスと上手くいかないクラスが出てきます。クラスの雰囲気を掴み、そのクラスにあった授業を行うことが求められます。授業は「なまもの」と言いますが、本当にその通りだと感じました。ことが終わるまで成功するのか、失敗するのか分かりません。絶対がない世界だと感じます。上手くいかない日々が続くと教師も人間なので不安な気持ちになったり、イライラしたりします。神経質になるといつも以上に態度が気になる生徒に指導したくなるものです。しかし、校長先生が「頑張っている生徒を褒め、授業に協力してくれる仲間を増やすことが大切。」と悩んでいた私に御指導してくださいました。その意識を持つようになってから、私も生徒の優しさに感謝するようになり、頑張っている生徒もその頑張りが救われているような気がします。どんな時も生徒との信頼関係を築くこと、安心できる環境を作ることは大切だと感じました。

⑵　指導力向上について

私には、教員として必要な力をつけるために、育成指導主事の先生がついてくださっています。月に１回授業を見に来て下さり、御指導して下さいます。授業の指導案を書き、その内容の授業を見て御指導くださいます。指導案はもう10回程書いていますが、全く慣れません。英語と道徳の２種類を書きましたが、どちらもとても難しく感じます。指導案は授業をイメージして書きますが、イメージが足りず、実際にやってみるとうまくいかないこともあります。それら全てを含めて御指導くださいます。授業は生徒にするもので、普段は誰にも見て頂くことがないので、このようにアドバイスを頂ける機会はとても貴重だと感じています。そして、一番初めに教わったことは、「TTP＝徹底的にパクれ。先輩の授業を見て、盗めるものを盗め。」ということです。副担任だった頃は、週に２，３時間程先輩の授業を見学させて頂きました。授業の見学は、授業内の活動や生徒とのやり取りなど、見て学ぶことがいくつもあります。担任になってからは、授業を見に行くことが全くできなくなってしまったので、もっと見ておけばよかったと少し後悔しています。教科指導の腕を上げるために、良い物を知るというのは本当に大切だと感じました。

5．部活動指導について

私は剣道部の副顧問をしています。私は剣道経験が全

くありません。中学１年生の部員と共に最初から勉強を始めました。本校の剣道部は全国大会に出場するレベルの強いチームです。男女合同で稽古をしており、今夏、男子は全国大会、女子は東海大会に出場しました。剣道未経験者、教員１年目で県を制覇し、全国の舞台へ飛び立つとは想像もしていませんでした。これは一重に主顧問、外部指導コーチの御指導のおかげです。剣道ド素人の私は、技術的な指導はできなかったため、自分に出来ることを探すように心がけました。その結果、２つのことを意識しました。

１つは部員と一緒に稽古をすることです。と言っても、準備体操や素振り稽古だけです。それでも、生徒たちは、剣道に興味を持っている副顧問の姿を見て喜びます。冬場の稽古は寒いので逃げようと思っていましたが、「ずるい」と言われ一緒に寒さを体感しました。部員たちはとても満足そうな顔をしていました。子どもと同じ気持ちになる、共感することは大切だと感じました。やらされるより一緒に取り組むことの大切さ、心の開き方を学びました。

そして、もう一つは、精神面でのサポートをすることです。全国大会を目指す強豪チームではありますが心は、か弱い部員たちです。勝ってもおごり高ぶらない良さはありますが、一つ一つの出来事に打たれ弱い部分があります。そのような部員たちに、私自身の経験を含めた話をすることで、心のケアとサポートをするようにしています。

何か自分に出来ることを見つけることで、生徒の心を開くことができると感じました。生徒は教師のことをとてもよく見ています。だからこそ、私が出来ることを頑張っている姿も知ってくれており、信頼関係を築くことが出来ます。何も出来ない、とあきらめていてはいけないと感じました。

６．今後の課題について

教員２年目に向けて、今後の課題は２点あります。

１点目は、さらなる教科指導力の向上です。１年目の初めに比べて、出来ることは当たり前に増えました。成長したと感じている部分もあります。しかし、まだまだ出来ることはたくさんあると思っています。なかでも、オールイングリッシュの授業を特に意識したいと思います。伝わらないことを恐れ、簡単に伝わる日本語に逃げてしまいがちですが、生徒が英語に触れる時間を少しでも長くし、刺激を増やせるよう意識していきたいと思います。また、単元構想をしっかり練って授業を進めることが出来なかった単元もあるので、ゴールを踏まえた上での逆算していく授業計画を意識したいと思います。

２点目は、生徒指導力を向上させることです。良くないことを良くないと指摘することは今でもできます。しかし、生徒が納得するように、私自身の感情を押し付けない指導をできるようになりたいと思います。生徒が起こした行動の背景をしっかりと傾聴することを心掛けたいと思います。また、先輩の指導の様子を見て、学べるもの、良いものを吸収したいと思います。

７．おわりに

私の武器は「若さ」です。今は、「若さ」が様々なチャンスを与えてくれています。若いからこそ、生徒の心が近くにあります。そして、周りの先生方も若いからこそ機会を与えてくれます。私には研修主任から頂いた大切な言葉があります。「今悩んで、いつか新しい学校に異動した時、困らないようにしよう。今なら何度でも失敗していい。」という言葉です。何度も指導案が書けず、やり直していた時に、かけて頂いた言葉です。１年目だからこそ言っていただけた言葉だと思います。「若さ」には期限があります。期限が来たときに、若さ以外の強みを持っていたいと思います。だからこそ「若い」今のチャンスを大切にし、これからも高みを目指したいと思います。

教員生活を１年過ごし、人生が一本の線で結ばれたように感じています。これまで、好きな物、興味ある物、経験が点々としていましたが、それらが先生という仕事を通して繋がりました。人生の経験に無駄なことなど無いと実感しました。教育だけの世界に染まらず、広い視野を持ち、豊かな人間になりたいと思います。

最後に、この１年で教員という仕事の特殊な面や責任の重さを強く感じました。戦力にならない自分のちっぽけさに涙する日々もありました。しかし、その分だけ達成感ややりがいも多く、生徒の成長、自分自身の成長に歓喜しています。こうして日々生徒と共に学び、成長することが出来ているのは、日々、御指導くださる先輩方のおかげです。そして、私が教員になることを大学４年間サポートしてくださった関西学院大学教職教育研究センターの先生方、職員の方々、共に教壇に立つことを夢見て励まし合ってきた勉強会のメンバーのおかげだと思います。本当にありがとうございます。この恩を忘れず、これからも教員として、一人の人間として豊かになっていくよう努力していきます。

（あかお　みさき・磐田市立磐田第一中学校教諭）